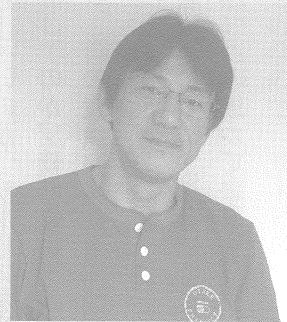


グループホーム＋認知症カフェ＋保育園 地域で育む認知症ケア

田邊恒一氏はグループホームを運営し、認知症介護指導者*として認知症カフェをはじめ地域における認知症の理解啓発活動に取り組んでいます。さらに保育園を開設し、認知症の方と園児との触れ合いの場を提供しています。そこで今回は、介護施設に限定しない、地域での認知症ケアの在り方について伺いました。

*認知症介護研究・研修センターの研修を受け、認知症介護の専門家として介護職員の教育にあたり、地域の指導者としての役割も担う人材。



有限会社 ウェルフェア代表取締役
認知症介護指導者

田邊 恒一氏

いただくための大切な取り組みだと思っ
て活動しています。

もう1つ、認知症の方の症状が進行する前に関われる点も、認知症カフェなどの大きな意義と言えます。グループホームに続いてデイサービスを始めると、認知症の方の症状が進行する前にお会いして、地域で長く支えることが大切だと考えるようになりました。

実際に、グループホーム谷津苑の女性入居者の1人は、認知症カフェを訪れたのがきっかけで、私たちのお付き合いが始まりました。当初は70代前半のお元気な方で、お話しするうちに認知症だとわかりました。カフェで仲良くなったお友達と一緒にカフェに通い、介護が必要になるとカフェで顔なじみだったケアマネジャーが担当となり、デイサービスに通うようになりました。その後、在宅での生活が難しくなり、昨年末からグループホームに入居されました。早い段階からお付き合いができると、暮らしの場所が自宅やカ

Q

認知症ケアの指導者として、現在、ケアにどのような取り組みでいらっしゃいますか。

当社では、介護保険サービスとして、民家を改築したグループホーム秋津と、ある会社の社員寮を改築したグループホーム谷津苑を運営しています。谷津苑のほう

は1階が認知症対応型デイサービス、2階がグループホームとなっており、居宅介護支援事業所と訪問介護事業所を併設しています。

加えて、いまはコロナ禍で実施できませんが、近所の袖ヶ浦団

A

2つのグループホームを中心とするケアに加え、認知症カフェなどの地域への認知症啓発活動に取り組んでいます。

施できませんが、近所の袖ヶ浦団



袖団カフェは毎月第3日曜日に開催。育児中の親御さんも子どもと一緒に参加できるよう、袖団おやこカフェ（左）も同じ場所で開催。（いずれも現在は休止中）。

フェからデイサービス、グループホームへと変わっても、その方らしい暮らしを継続することが出来ます。ご家族も安心され、また、長く支えることで施設に収入も入ります。

Q

保育園も開設されましたが、その理由や経緯について、教えてください。

A

職員確保を目的にスタートしましたが、子どもを通じて地域との関係も育っています。

前述のグループホーム谷津苑の敷地内にロゼッタ保育園を開設して運営しています。最初は職員確保が目的でした。子どもを抱えながらも働きたいという女性のニーズに応えようと、平成22年にグループホームの6畳間をリフォームして保育ルームを開

設しました。職員の子ども3人でスタートしたのですが、職員以外のお母さんからも声をかけられ、9人定員の認可外保育園に広げて保育士も増員したところ、すぐに一杯になりました。

事業所内託児所というかたちの場合、スペースと保育スタッフを確保できれば開設自体は難しくありません。当時、託児所付きで求人を出すとかかなりの応募があったので、職員確保に大きな効果があったと思います。その後、令和元年10月に認可保育園に移行し、口コミで入園希望者が広がりました。

保育園の運営を通じて感じるのは、子どもとの関わりを作ることで、地域との関係も太くなっていく、ということです。保育園に孫を預けている方が認知症カフェを知り合いに紹介してくれ、園児の親御さんから介護の相談を受けるケースも多くあります。最初に保育園に入園した子どもたちは高校生になりましたが、いままお母さんは訪問介護で働いていて、夏

休みには子どもたちがデイサービスに遊びに来ます。

認知症カフェや保育園を運営することで、子どもやその親御さん、介護が必要になる前の年配の方など、いろいろな地域の方たちとの関係ができてきます。それが地域に根差した認知症ケアにつながっています。東日本大震災の際にも、入居者の方を一時的に避難所でケアしなければならなかったのですが、多くの顔なじみの地域の方に助けていただきました。顔なじみの人が近くにいれば、認知症であっても避難所で混乱しないことがわかりました。

Q

園児と利用者の方との関わり合いは、どのような効果がありますか。

A

園児、利用者、スタッフの皆によい影響があると感じています。

子どもの力は本当にすごくて、非常に気難しい方も笑顔になります。



す。全介助で発語のない方が赤ちゃんを抱こうとするのを見ると、認知症が進んでも「心は生き

広々としたロゼッタ保育園は定員18名。広告を出さなくても、口コミですぐに一杯に。



ている」状態であり、それが認知症になっても楽しく暮らすための要素であることがわかります。利

利用者の方が一番うれしそうな笑顔を見せてくれるのは、握手や膝上の抱っこなど実際に子どもと触れ合っているとき。子どもたちはいつもとは違うよそ行きの顔に。保育園が高齢者と関わる貴重な機会に。

用者の方の笑顔はスタッフのモチベーションにつながります。

なお、子どもたちと認知症の方

が一緒に楽しく過ごせるよう、スタッフが配慮することが大切です。そのために、全スタッフが認知症サポーター養成講座を受講しています。

現在はコロナ禍

のなか、実際の触れ合いはない状態です。前述の全介助の方の表情も動きも止まってしまい、改めて子どもと触れ合う効果を実感しています。今後、こうした取り組みを行政や地域の方々と連携しながら、事業所の外へ広げていきたいと考

えています。

最近、子どもとの触れ合いは難しくても、外国人スタッフとのコミュニケーションに注目しているところ。ウエルフェアでは、昨年の9月と10月に特定技能制度を活用してベトナム人スタッフを受け入れました。22歳と31歳の女性で、利用者の方とのコミュニケーションにも大きな問題はありません。

当初は利用者の方に受け入れてもらえるか心配でしたが、実際には抵抗も混乱ありませんでした。ある男性利用者の方は一緒に絵を描き、ふだんはしない洗い物を手伝うようになりました。日本語があまり上手くないベトナム人の女性スタッフの面倒を自分が見てあげようとしているのです。そうした気持ちが引き出されたことに、驚きと興味を覚えました。

子どもや親御さん、外国人スタッフ、地域の方々とさらに関係性を深めて、幅広く認知症ケアに取り組んでいきたいですね。